
映画プリキュアオールスターズDX（改）

大川勇輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

映画プリキュアオールスターズDX（改）

【Nコード】

N6955P

【作者名】

大川勇輝

【あらすじ】

もしもさくらことキュアスターが原作のプリキュア達に出会っていた場合を想定した話。

(前書き)

原作の映画が好きな方はあまり見ない事をお勧めします。
駆けだして書いたため、少し不満な部分も多いと思いますが、大目
に見てください。

映画プリキュアオールスターズDX（改）

設定：・基本的には原作の映画通りのシナリオで行きます。

・カードキャプタープリキュアからは厳密にはさくらのみしか出番がありません。

（原作のプリキュアオールスターズがパラレルワールドに存在する為と、本作で

さくらが原作のプリキュア達に説明します）

・本作オリジナルの敵キャラが出現します。

全ての戦いが終わってから2カ月。さくら達プリキュアオールスターズは平和に過ごしていた。

そして久しぶりに全員集合したさくら達は花見をしようとしていた。それが新たな戦いの幕開けで

あるとはまだ誰も知る由が無かった。それと同じ頃、暗黒の巨大な球がどこも知れない空間を

進行していた。その球の中身がこれから不吉な事を起こすとはまだ誰も知らなかった。

さくら達が妖精達とのびのび花見できるよう特別な場所で花見をしていた。

うららが歌い終わり、つぎにさくらが歌おうとしたその時であった。さくら達全員が眩い光に包まれ、

ある場所へ移動したのは。その場所に辿り着いたさくらとかれん、そしてのぞみが最初に言った言葉は

「ここは！」「天界！?」「何で!?!」だった。他の者達も困惑していた。

何故なら天界とは2か月前に正式に戦いを終結し、1000年は見守る事を約束したばかりだったからだ。

そんなさくら達の前に「よく来たな・・・プリキュアオールスターズよ・・・」と言葉を発する

ゼウス率いるオリンポス十二神が現れた。その光景に又してもさくら達は驚いていた。

驚いているさくら達にゼウスが優しく、それでも重々しく語り始めた。

「今回、そなた達を呼んだのはある世界の危機を救って欲しい為だ。その世界はスターを除いたそなた達

プリキュアオールスターズが存在するパラレルワールドなのだ」

その内容に又してもさくら達が驚いたのは無理もない。自分達と全く同じ存在がいる世界があるとは、

ふつう考えられないからだ。少しして落ち着いたゼウスは再び語り始めた。

「その世界に今度現れる敵の1人『フュージョン』とやらはその世界のプリキュア達で倒せる可能性は

ある・・・だが、もう一つの敵『ヴェノムノヴァ』は違う。奴は幾つもの世界を地獄に陥れてきた『悪魔』

そのものなのだ・・・だからこそ、そなた達に今回の任務を任せたいと思う・・・」

それを聴いたさくら達は一度顔を合わせるとすぐに頷き合い、ゼウスの方に決意の表情を向けた。

それを見て満足したゼウスは一つの注意をした。それはその世界に行けるのは実質上さくら1人だけという

事だった。その事に特にかれんが「何故です!？」と反発したが、すぐにある事実気付いたほのかが

諭すと、かれんは悔しがりながらも納得した。その事実は後に語る事にしよう。

そして出発の時、さくらはかれんにあるものを渡された。それはかれん達20人の絆を象徴した
プレスレットであった。かれんは「忘れないでさくら！貴方は何処にいても！決して一人ではないという事を！」さくらにそう言い放った。その言葉にのぞみ達も力強くうなずき、さくらも笑顔で

「有難うございます！！」と言い、最後にゼウス達によって開かれた時空の扉に入る前に

「行ってきます！！」と言って、突入していった。

さくらが向かった後もかれんはその場を動かずにいたが、なぎさがかれんの肩に手を置き、それに気づいて
横を向いたかれんになぎさが笑顔をむけると、かれんも微笑み返した。

さくらはそれから数時間後、無事その世界に辿り着く事が出来た。

その世界の情報については事前に

ゼウス達に教えてもらっていたので、問題はなかった。後は誰にもばれないように気配を消すのみだった。

その後すぐ、謎の暗黒球体が別の黒い球体と共にその世界に現れたのはさくら以外には分からなかった。

しばらくして、さくらが最初に戦いの場をみたのはピーチ達3人の戦いであった。

しかしその戦い方ははっきり言って未熟そのものであった。まだフュージョンに力が足りなかったから

何とか退けたものの、さくらからすれば先がおもいやられる戦い方であった。

フュージョンを退けたものの、うっかりシフォンから目を放してしまい、その隙に何処かへ勝手に

行かせてしまったラブ達に気配を消しながら様子を見ていたさくらは苦笑していた。

しかし放っておく訳には行かず、すぐにタルトの向かった場所へとレポートした。

そのタルトが向かった先パルミエ王国でタルトがつけられていた事に気づかず、大ピンチを起こして

しまったと事に呆れかえりながらもさくらはばれないように妖精達を逃がしてやった。

その後、1人だけで逃げたルルンの後を追ったさくらはそこで自分にとって最もなじみ深いプリキュア5

の戦いを見る事になった。初めて見るミルキイローズの戦いも見ていたが、やはりさくらからすれば、

不満の多い戦いであった。アクアとルージュが技を吸いこまれ、フュージョンの逃走を許してしまった。

その事に又しても呆れたさくらであったが、そろそろ姿を少しだけ見せる時と悟り、その場にまだいた。

ルルンの言った人物の名前に聴き覚えのあるドリームが思い出そうとすると、フードをかぶったさくらが

「美墨なぎさ・・・雪城ほのか・・・九条ひかり・・・光の園を救った伝説のプリキュア達・・・」と

呟きながら、ドリーム達の後ろに現れた。突如自分達の後ろに現れたさくらにドリーム達は警戒した。

しかしさくらはそれで気を悪くするようなそぶりはなく、フュージョンが逃げた方を指さしながら言った。

「あれが向かった先はおそらく横浜・・・手遅れになる前に貴方達は光の園、そして緑の郷のプリキュア達

そして新たなプリキュア達と共にあれの野望を阻止しなければならぬ。急ぎなさい、プリキュア5・・・」

そこまで言つと、さくらはルルンの方を向き、「『未来を紡ぐ光の王女』ルルン・・・貴方には泣き顔よりも笑顔が似合っています・・・彼女達と共に向かえば貴方の大切な仲間に出るでしょう」と言つた。さくらはそう言い終わると、次の目的地へと向かつてテレポートして行つた。

残されたドリーム達は「一体あの子は誰？」「何か目的があるのかしら？」「油断しない方がいいわね」と完全にさくらに対して不信任感・警戒をあらわにしていたが、その後にルルンが言つた「不思議ルル・・・あの子から感じた物は悪いものじゃなかったルル・・・まるで光の園のクイーンみたいな清らかなものを感じたルル・・・」の言葉にますますわからない状態に陥つて行つた。

その後でルルンから詳しい事情をドリーム達は聞く事した。

ほぼ同じ頃、なぎさ・ほのか・ひかりは咲の実家である『PANP AKAパン』でパンを大量に買った後、大空の樹の下で休んでいた。なぎさ達3人はそんな中で大空の樹から何かを感じていた。それが何であるかは、まだこの時のなぎさ達には分かるはずもなかった。

そしてなぎさが勝つたチヨココロネを食べようとした時、逃げてきたムーブとフープが振り向いたなぎさの頭に激突した。最初は訳が分からなかった3人だったが、フュージョンの分身がゼンナーに変化した事、及びミツプル達がかけた事で変身し、戦いを始めた。その戦いをさくらが大空の樹の後ろで気配を消しながら見ていたのは誰にもわからない事であった。戦いを見ていたさくらはブラック達の戦い方に

ピーチ達やドリーム達の時同様に（あの戦い方ではあれには勝てない・・・）と心の中で思っていた。

案の定、ブラックとホワイトの放ったマーブルスクリューを吸収し、去って行った。

フュージョンが去った後、ブラック達がミップル達からムーブ達の事を紹介してもらい、ムーブ達から

咲と舞の名前を聞いた時、「日向咲、美翔舞・・・緑の郷のプリキユア達・・・」と呟きながら

さくらがブラック達の前に姿を現した。突然の事に身構えるブラック達だったが、それを気にせず

さくらがフュージョンを去った方を指さしながら語った。

「あの化け物の向かった先は横浜・・・あれを止める為には全てのプリキユア達の力を結集しなければ

いけない・・・急ぎなさい、光の園を守りしプリキユア達よ・・・」さくらはそこまで言うのとポルンを

見て「ルルンは無事です・・・パルミエ王国を救ったプリキユア5と共にいます」と告げると同時に

レポートして去って行った。残されたブラック達が呆然としていたのは言うまでもない。

ブラック達の戦いが終わった頃、咲・舞はナッツハウスに辿り着いていた。

その後すぐにココ・ナッツ・シロップと共にフュージョンに追われていたが、フラッピ達が

かけつけた事により、変身して対戦した。その戦いを見ていたさくらがやはり2人の戦い方に不満を

持ったのは言うまでもない。又してもエネルギーを吸収されてしまい、逃亡を許したのだ。

それでもさくらは我慢しながら2人に「横浜へ向かいなさい・・・全ての真実はそこにあります」

と言い終わると同時にすぐにテレポートした。残された者達が呆然としたままで。

さくらはそれからしばらくの間、異空間の中で警戒しながらも体を休めていた。

さすがに別世界での連続テレポートはさくらの体にこたえたのだ。体を休めながらもさくらは、

自分の本当の倒すべき相手『ヴェノムノヴァ』が現れた時に備えていた。

そしてその時は遂にやってきた。『ヴェノムノヴァ』の気配を感じ取ったさくらは

瞬時にその場に向かってテレポートしていった。

ちょうど同じころ、ミラクルライトで奇跡の復活を遂げたプリキュア達は突如として現れた

『ヴェノムノヴァ』のたった一撃で又しても戦闘不能にされてしまっていた。しかもココ達が

もう一度ミラクルライトを使用しようとした瞬間、『ヴェノムノヴァ』によって粉々にされてしまい、

シフォンまでもが捕まってしまうという最悪な事態になっていた。

「これでお前達の希望は完全に消える！！」ヴェノムノヴァは泣き叫ぶシフォンを片手で持ち上げながら、再び傷つき倒れたプリキュア達に向かって勝利宣言とも思える言葉を高笑いしながら発した。

その言葉にプリキュア達は反発しようとしたが、もはや立ち上がる力はもちろんまともにしゃべる事も

出来ない状態であった。そんなプリキュア達の様子にココ達も完全に絶望した顔をしていた。

「もう駄目ココ・・・」「ミラクルライトも破壊され、プリキュア

達ももう立ち上がる力は残っていない

ナッツ・・・」「このままおわってしまうんかい!?」「もう諦めるしかないポポ・・・」「ルル」

「ムプ」」「ププ」」「メポ・・・」「ミポ・・・」「ラピ・・・」「チヨツピ・・・」

誰もが絶望を抱き、諦めていた。そんな光景に満足したヴェノムノヴァはフュージョンの方を向き、

「さあ、フュージョンよ！この赤ん坊を吸収して、奴らに最後の絶望を味わせてやれ!!」

「死の前の最後の絶望をな!!」とフュージョンにシフォンを吸収させようとした。

それを聞いたフュージョンは「ああ、分かっている」と言い終わるや否や、シフォンを吸収しようとする

し始めた。それを阻止しようとは何とか意識を完全に取り戻したプリキュア達は立ち上がろうとするが、

駄目だった。ヴェノムノヴァに受けたダメージが想像以上に大きかったのだ。

それを遠くから見ていたさくらは遂に変身する事を決意し、フードを脱ぎ捨てると同時に

「プリキュア！スターエボリューション!!」と叫びながら、眩い光の中に包まれていった。

そのさくらの行動に気づいていないフュージョンとヴェノムノヴァは今にもシフォンを吸収しようとしていた。

ピーチが力を振り絞って「シフォン!!」と叫んだ。その時であった。奇跡が起きたのは。

シフォンを抱えていたヴェノムノヴァの腕に光弾が当たり、シフォンは弾き飛ばされ、更にシフォンは

光弾が放たれた方からやってきた眩い光に包まれ、その光は更にヴェノムノヴァ・フュージョンそして

周囲にいた再生幹部達の目を怯ませるだけでなく、弾き飛ばしたの

であつた。

眩い光は更に輝きを増し、プリキュア達に近づくと、彼女達そして妖精達をも光の球体に包み込み、フュージョン達から大分離れた場所に移動した。移動し終わると、光は少女の姿に形を変えていった。

その腕にはシフォンが抱かれていたが、シフォンは先ほどまでとは違い、笑顔を浮かべていた。

誰もが戸惑う中、光を発する少女はピーチにシフォンを託した。一瞬訳が分からなかったピーチであつたが、すぐにシフォンを受け取り、強く抱きしめた。少女はその様子に満足している様子であつた。

「何者だ!?」叫ぶフュージョン。その声は先ほどまでの余裕綽々と比べると焦りが現れているようだった。

一方ヴェノムノヴァは（この圧倒的な存在感・・・もしやあれは『伝説の』!?）と何かに気づいた様子

であつた。再生幹部達はフュージョン同様未知なる存在に恐怖を抱いている様子であつた。

少ししてフュージョンの叫び声に少女は立ちあがつた。そしてその手を強く握りしめながら振り返ると、

「私の名はスター！キュアスター！！漆黒の闇を切り裂く一条の光の星！！！」

「遙かなる異世界から貴方達を倒す為にやってきたプリキュアです！！！」

と名乗りを上げた。そう光を発していた少女の正体はさくらの変身したキュアスターだったのだ。

「『キュアスター!?』」「『異世界からやってきた!?』」「『プリキュア!?』」「『どういう事!?』」

プリキュア達は訳が分からないという状態であつた。そしてそれはフュージョン達も同じであつた。

唯一人ヴェノムノヴァだけは肩を震わせて黙っていた。しばらくすると高笑いし始めた。

誰もがその様子に驚いていると、ヴェノムノヴァはまだ笑いながらも言い放った。

「そうか！やはりそうか！お前さんがあの『伝説の究極最強無敵のプリキュア』と名高い『キュアスター』」

だったのか！俺は一度貴様と戦ってみたいと思っただけだぜ！！」ヴェノムノヴァの言った言葉

『伝説の究極最強無敵のプリキュア』という言葉にスター以外の誰もが又しても騒いでいた。

そんな周りを無視してヴェノムノヴァは話し続けた。「とは言え、俺もお前さんの実力を直に見ない内から

勝負する気にはならねえ！だからお手並みを拝見させてもらうぜ！！」一端そう言い終わると、

再生幹部達に「お前ら！あの嬢ちゃんの相手をしてやれ！！後のぞこは無視してもかまわん！！」とスター

だけを襲うよう命令した。最初は戸惑っていた幹部達もヴェノムノヴァの指示にはすぐに従い、突撃を

開始した。それを見たキュアスターもプリキュア達の周りに万が一に備えての結界を張ると、後ろに着けて

いたマントを4枚の白き翼へと変えて、スターのその姿に驚くプリキュア達を気にせず幹部達に突入した。

プリキュア達特にホワイトやミントは悪魔達の進行を阻止する為に立ち向かう天使の姿を見たように感じた。

僅かに飛翔しながら幹部達に立ち向かって行ったキュアスターは、幹部の中でも一番先に飛び出してきた

ハデーニャ、カレハーン、ウラガノス、スコルプをスピードに乗ったまま放ったキック一発で四方に吹き

飛ばし、更に突入して来たキントレスキーの渾身の一撃を片手で受

け止めると同時に自分の方に引つ張り、空いていたもう片方の手によるパンチを腹に打ち込むと、キントレスキーは悲鳴を上げる暇もないまま吹き飛んで行った。次にアラクネア、ドロドロ、ミズ・シタタレの糸・泥・水による変則的な攻撃を仕掛けてきたが、スターはまるで踊るかのように回転しながら全ての攻撃を綺麗にかわしていき、一人ずつたった一撃で吹き飛ばしていった。残された幹部達がそんなスターに恐れをなして困んで全員で攻撃をしようとしたが、スターはそれにも冷静に対処し、『シャイニングカリバー』・『スターブーメラン』であつというまに幹部達の大半を消滅させてしまった。パワーアップして突っ込んできたキントレスキーも一時的に激しい打ち合いをした後、『フレイムスターマグナム』で腹をぶち抜き、最後には持ち上げると『パワーリフタ』で宙に投げ消滅させた。そして残った幹部達も遂にスターの放った必殺の一撃『プラネットショット』により、全滅した。そこまでの時間はわずか2分足らずであつた。

プリキュア達とフュージョンは目の前で起きた事に啞然としていた。再生幹部達をたった1人で短時間でしかも圧倒的な勢いで倒してしまつたキュアスターの実力に完全に驚愕していたのだ。

特にプリキュア達は過去に戦つた事のある幹部達の実力を知っているだけに余計にキュアスターの実力がどれほどのものなのか理解できたのだ。まさに『究極最強無敵』と言う名にふさわしい実力であつた。

そんな中で、ヴェノムノヴァがスターに戦いを挑み始めた。さすがに幹部達とは次元が違う実力にスターも

最初は互角の戦いだったが、ヴェノムノヴァから感じた戦闘狂的性情、卑劣、傲慢、悪魔と言えるやり口にスターは「貴方だけは……絶対に許さない!!!」と叫ぶと同時に一気に押し始めた。

一度は吹き飛ばされたヴェノムノヴァは巨大化するとスターも遙か彼方の世界にいるかれんやのぞみ達5人の力を借り、真の姿『キュアギャラクシー』に変身した。その事に驚くプリキュア達にギャラクシーは蘇らせたミラクルライトでプリキュア達を回復させ、フュージョンを倒させている間に自分はヴェノムノヴァを必殺技である『フォトンツインギャラクシーストリーム』で倒したのであった。

戦いが終わり、プリキュア達が勝利に沸く中、キュアギャラクシーは何も言わずに去ろうとしていた。

その事に気付いたドリームとピーチが慌てて「待って!!!」と声を掛けた。

その声に反応したキュアギャラクシーは振り向かなかったが、一旦静止した。

彼女のその行動を見て、ほっとしたドリームは「何処へ行くの?」と質問した。

それに対しギャラクシーは「私はあくまでも『ヴェノムノヴァを倒す』間だけこの世界にいられる

パラレルワールドの存在です。これ以上この世界に私がいれば、この世界は崩壊します」と真実を告げた。

この事実こそがさくらしか行けない理由だった。さくらでさえそうなのだから、同じ存在のかれん達が

その世界に行けば、それだけで世界が崩壊してしまうのだ。それはゼウス達でも阻止できない程に。

真実を聴いて愕然とするプリキュア達を無視し、去ろうとするギャ

ラクシーだったが、最後に

「でも！いつかまた会えるよね！」と叫ぶドリームの声に微笑みながら「いつかまたこの世界に危機が

訪れしとき、また会えるでしょう」と語りながら光の中へと消えていった。

ドリーム達はしばらくの間その場から離れる事はなかった。別の世界の、自分達を助けてくれた存在を

思いながら。そしてさくらも帰ってきた世界でかれん達による熱い歓迎を受けていたの言うまでもなかった。

オリジナルキャラ（敵）

ヴェノムノヴァ：フュージョンと同等あるいはそれ以上の力を持った別次元の悪魔たる存在。

数々の世界を絶望・恐怖に陥れ、殺す代わりに無限の苦痛を与える存在と言われている。

原作のプリキュアオールスターズ全員を一瞬で壊滅寸前まで追い詰める程、実力が高い。

さくらことキュアスターの事も噂であるにせよ、『伝説の究極最強無敵のプリキュア』と

して知っていたようであった。戦闘狂とも言える部分があり、自分と対等に戦える存在で

あるキュアスターとの対戦を求めているようであった。

身長 2.3 m ～ 5.5 m 体重 150 kg ～

6万トン

(後書き)

今後、カードキャプタープリキュアを再度投稿していきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955p/>

映画プリキュアオールスターズDX（改）

2010年12月30日23時53分発行